

倉本聰

倉本聰という脚本家並びにテレビドラマのプロデューサーがいる。「前略おふくろ様」「北の国から」という番組で一躍脚光を浴びたこともある。

北海道の富良野に住んで演劇集団を率いていたこともある。そのころの出来事は、「谷は眠っていた」や「北の人名録」という本になっていて、とても面白く読んだ覚えがある。

倉本聰の書いた文章の中で忘れられないものがある。それは、自分の母親について書いた文章である。

御母堂がお茶の教授をささやかながら続けていた時に、何か不都合があったのかお茶の教授を続けることについて大きな声で否定した結果、御母堂はお茶の世界から身を引いてしまい、うつのような晩年を過ごされていたことについて、この上もない後悔の念をもって書かれた一文であった。

なぜ、この文章が忘れられないかについては、二つの側面がある。

一つは、直截的に自分の母親のことを考えたということである。倉本聰の御母堂と同じようにささやかなお茶の教授を今も続けている。足が思うようにならず、弱気になっていた時にも、お茶の教授を止めなさいとは言わなかった。きっと、生きる糧を失う可能性について、倉本聰の文章から学んでいたからである。

結果、様々な方々の支援で、私の母親は人工関節を左足に埋め込む手術を施していただき、何とか今も自分の足で歩くことができ、お茶の教授も月に3度程度、お弟子さんの世話を受けながら続けることができている。生きる力を失わないで済んだことについて、この上もなく様々な方々の支援にありがたく感謝している。

もう一つの点は、生徒の好奇心や進路への興味について、私たち大人が採るべき態度についてである。

とかく、生徒一人一人のこれからの進路について、私たち大人は気がせくのか早め早めの対応を迫りがちとなる。生徒たちには生徒たちの思いがあって、いろいろ考え悩み、決定を先延ばしにすることもある。その時にこちらの意見を声高に言うことについては極力控えなければならないと思っている。

自分の長男も、高校時代には、この先職業を選択するについて何になるかについては「わからない」の一点張りであった。しかし、結果的に大学へは進み、大学院へも進み、今もまだ明らかではないと言っている。

父親としての考えはいろいろ選択肢の一つとして言うが、父の意見に従うことなどないと告げている。いつか自分で決めるだろうと思っている。

そうかといって、先手を取ることが大事であることも重々承知である。しかし、ある日突然、子どもは決定するはずだ。何か大きな影響がある言葉や行いによって、間違いなく自分で決めるはずだ。生徒も同じである。

倉本聰は、そのことについて私に大きな示唆を与えてくれた。生徒たちは間違いなく才能豊かであり、間違いなく社会貢献を意識しており、進路先についても、自分で決定するはずだ。大人たちは、そのことを心から信じていたいと思う。

